

# “有点儿”と“比较”について

安藤好恵

0. 日本語の「少し」に対応する中国語としては、“一点儿，有点儿，稍微…”等の他，状況に応じて幾つかの語が挙げられる。今，仮に「この机はちょっと高い」という文を中国語に訳してみると，以下の3通りの文が考えられる。

A. 这张桌子有点儿高。

B. 这张桌子高一点儿。

C. 这张桌子比较高。

日本語の話せるインフォーマントに尋ねたところ，真っ先に返ってきたのはAの“有点儿”を用いた文であった。Bは，別の机と比べて，こちらの方がちょっと高いという意味になる。Cであるが，“比较”は通常「比較的」，「わりあい」といった日本語に訳されており，これが日本語の「少し」に相当するのかという疑問を持たれる方もあるかもしれない。しかし，《現代漢語虚詞例釈》(P79)によれば，“比较”は，一般に程度がそれほど高くないことを表しており，“比较好”といえは，普通よりも少しよいが，“很好”ではない，とある。従って，“比较”を用いて表される程度は，先に挙げた机の高さを例にとれば，「机」と聞いて，一般に人が思い浮かべる高さを，仮に「暗黙の基準」と呼ぶとすると，その「暗黙の基準の高さ」と，「(基準に比べて)とても高い」との間に位置すると考えられる。このことから，先に挙げた“有点儿”，“一点儿”と同様，“少し”を表すグループとしてみていきたい。

さて，先に挙げた「この机はちょっと高い」ことを表す3例のうち，Bの“一点儿”は，別の机との比較という，明確な比較基準のもとに使われている。それでは，Aの“有点儿”，Cの“比较”を用いた文にはどのような違いがあるのだろうか。

本稿ではこの二つの副詞について，両者が形容詞を修飾する際に用いられる場面を比較し，それぞれの働き，表す意味の異同を明らかにしようと試みるも

のである<sup>1)</sup>。

1. “有点儿”，“比较”と後続する形容詞の組合せについて

1.1 《現代漢語八百詞》では，“有点儿”と“比较”について，以下の如く記述している。

① 有点儿：程度が高くないことを表す；“稍微”。多く不如意な事柄に用いられる。(p. 559)

② 比较：一定の程度を備えていることを表す。否定形には用いない。(p. 63)

また，馬真1988では“有点儿”を絶対程度副詞，“比较”を相対程度副詞と分類し，前者はいかなる比較文中にも現われない，後者は比較文に用いることができるが，[X + 比 Y + F + AP] の文には使えない，とある。

1.2 以下の例では“有点儿”と“比较”を用いた例文 *a*, *b* は共に成立し，微妙なニュアンスの違いはあるが，それぞれ互換可能である。そのニュアンスの違いが，互換不可能な例につながっていくことは，1.3 以下でみていく。

- A 1) *a*. 那衣服有点儿脏。  
*b*. 那衣服比较脏。
- 2) *a*. 这种做法有点儿野蛮。  
*b*. 这种做法比较野蛮。
- 3) *a*. 这个人有点儿骄傲。  
*b*. 这个人比较骄傲。
- 4) *a*. 他工作有点儿消极。  
*b*. 他工作比较消极。
- 5) *a*. 他办事有点儿马虎。  
*b*. 他办事比较马虎。
- B 6) *a*. 这个月工作有点儿忙。  
*b*. 这个月工作比较忙。
- 7) *a*. 昨天天气有点儿冷。  
*b*. 昨天天气比较冷。
- 8) *a*. 这几天参观的人有点儿多。

“有点儿”と“比較”について

- b. 这几天参观的人比较多。
- 9) a. 那个商店的东西有点儿贵。  
b. 那个商店的东西比较贵。
- 10) a. 我家离学校有点儿远。  
b. 我家离学校比较远。

A類で用いられている形容詞は、いずれも“貶義”の形容詞である。もしもこれを“褒義”の形容詞に取り替えると、*a*は成立せず、*b*のみが成立する”。

- 1)' a. \*那衣服有点儿干淨。  
b. 那衣服比较干淨。
- 2)' a. \*这种做法有点儿文明。  
b. 这种做法比较文明。
- 3)' a. 这个人有点儿谦虚。  
b. 这个人比较谦虚。
- 4)' a. \*他工作有点儿积极。  
b. 他工作比较积极。
- 5)' a. \*他办事有点儿认真。  
b. 他办事比较认真。

また、例1)'~5)')の形容詞の前に“不”を加えると、*a*は成立するが、*b*は成立しなくなる。

- 1)'' a 那衣服有点儿不干淨。  
b \*那衣服比较不干淨。

B類は、文脈により、*a*が成立しなくなる場合がある。例えば、

- 6)' a 这个月工作有点儿忙，我没休息。  
b 这个月工作比较忙，我没休息。

という文脈では、*a*, *b*共に成立するが、例えば不況が続き、ここ数か月ずっと仕事がなかったというような場合、

- 6)'' a \*这个月工作有点儿忙，我很高兴。  
b 这个月工作比较忙，我很高兴。

*a*は成立せず、*b*のみが成立する。6)' *a*と6)'' *a*を比較すると、6)'の“忙”

という状態は、話し手にとって望ましくないマイナス要素であり、これはA類の“貶義”の形容詞と共通する。一方6)の“忙”は、話し手が好ましく思っているプラス要素である。このことも、例1)~5)の“褒義”の形容詞を用いた不成立の例に共通する。

以上の結果をまとめると、“有点儿”は、後続する形容詞に対して選択性を持ち、“褒義”の形容詞は、通常“有点儿”に後続してその修飾を受けることはできない。また、中性の形容詞については、先の“忙”の例でみたように、文脈上、話し手にとってその状態がプラスの意義を持つのであれば、成立しない。一方、“比較”は後続する形容詞の“褒義”、“貶義”に関して、選択性を持つということはない。但し、否定形は“比較”の後にくることはできない。

1.3 先の例では、中性の形容詞を用いた文は、文脈上の問題を除いて、共に互換可能であったが、ここでは、客と店員という発話者の立場から、“有点儿”と“比較”が互換不可能な例を挙げる。

11) 店員：这双鞋比较大，你试一试。

客：这双有点儿小，请换稍大一点儿的。

12) 店員：这个东西比较便宜。

客：有点儿贵，有没有别的更便宜的？

例11), 12)の客と店員の言葉は、もしそれぞれが独立した一文である場合には、互換が可能である。しかし客と店員の会話という状況下においては、それぞれの文の“有点儿”と“比較”を入れ替えることはできない。この場合、店員は冒頭で述べた「暗黙の基準」に基づいて靴を選んでおり、店員にとっては「少し」大きめのサイズの靴も、客にとっては「少し」小さいのである。以下、このような互換不可能な例についてみていく。

1.4 以下の例は、話し手が己の所有物について述べている場面である。

13) a. 这双鞋已经有点儿小了。

b. ?? 这双鞋已经比较小了。

14) a. 这件衣服已经有点儿短了。

b. ?? 这件衣服已经比较短了。

ここでは、話し手は、特定の靴や服を取りあげて、「(自分にとって) この

“有点儿”と“比较”について

靴は小さくなった」と言っている。このような、他の靴が介在する余地のない、話し手と靴とが対一の関係であるような場合においては、“比较”は用いられない。

1.5 ここでは、発話者の体験の有無に関わる、互換不可能な例を挙げる。

- 15) a. ??明天天气有点儿冷，你最好加一点儿衣服。  
(明日はちょっと寒いから、少し余計に着たほうがいいよ)  
b. 明天天气比较冷，你最好加一点儿衣服。  
(明日はわりに寒いから、少し余計に着たほうがいいよ)

- 16) a. ??下星期我有点儿忙。  
b. 下星期我比较忙。

上例で、“有点儿”を用いた例文 a は、通常成立しにくい。例15), 16) と、成立可能な例 6), 7) との違いは、15), 16) は“明天”や“下星期”といった、これから先に起こるであろう寒さや、忙しさの程度に対して“有点儿”を用いていることである。このような場合には通常、予測、推量を表す他の副詞の助けが必要である。

17) 明天天气大概有点儿冷，你最好加一点儿衣服。

18) 下星期我好像有点儿忙。

例17), 18) はいずれも成立する”。

未来に限らず、例えば以下の例のように、話し手が昨日東京にいなかったり、話し手が北京に行ったことがない場合にも、“有点儿”は通常用いられない。

- 19) a. ??昨天东京的气温有点儿低。  
b. 昨天东京的气温比较低。  
20) a. ??北京的春天有点儿干燥。  
b. 北京的春天比较干燥。

もし、話し手が昨日東京にいたり、また、北京に行ったことがあるならば、例15), 16) はいずれも成立する。しかし、話し手がこれらのことを直接体験していない場合、“有点儿”を用いることはやはり不適當であり、推量もしくは伝聞を表す語と共に用いて初めて、文が成立する。

21) 听说昨天东京的气温有点儿低。

22) 北京的春天好像有点儿干燥。

以上の結果から、“有点儿”は話し手自身と強く結びついた、発話時における話者の実感を表す語といえよう。明日の状況や、行ったことのない場所の気候など、話し手が体験しておらず、従って実感を伴わないことについて述べる場合、“有点儿”は通常単独では用いられず、推量や伝聞を表す語句が必要となる。

1.6 ここでは、痛みや疲れといった、体内感覚を表す形容詞との組合せを取り上げる。

23) a. 我肚子有点儿疼。

b. ??我肚子比较疼。

24) a. 我有点儿累。

b. ??我比较累。

25) a. 我头有点儿晕。

b. ??我头比较晕。

26) a. 我腿有点儿痒。

b. ??我腿比较痒。

上例の“比较”を用いた例文bはいずれも不成立である。しかし、このことは、“比较”と後続する形容詞の組合せの問題ではない。以下の例文ならば容易に成立する。

27) 我告诉你，打青霉素比较疼。

(言っておくけど、ペニシリンを打つのはわりと痛いよ)

28) 大家都比较累了，今天就开到这里吧。

(みなさん結構お疲れでしょう、今日はここまでにしましょう)

29) 坐快速滑行车头比较晕。

30) 被蚊子叮了，比较痒。

上例23)~26)と、27~30)を比較してみると、どちらも、痛みや疲れといった、肉体的感覚の程度について“比较”を用いているのだが、発話時現在、話し手の身体にのみ起こっている内部感覚についての程度を表す、例23)~26)の

## “有点儿”と“比较”について

ような場合には，“比较”は用いられない<sup>4)</sup>。

以上の例をふまえて，“有点儿”と“比较”が用いられる条件を考えると、両者はいずれも何らかの基準からのずれを表している。この点において，“有点儿”と“比较”には意味上の共通性がある。ただ、その基準のたて方に相違があると考えられる。ここで、先程までの例を振り返ってみると、まず，“有点儿”については、1.3の靴の例のように、話し手自身が比較の尺度になること、また、1.5で述べたように、話し手の体験に基づく実感を表す言葉であること、などが挙げられる。一方，“比较”については、店員の靴の選び方、1.6で挙げた例のように、話し手の個人的な体内感覚については用いられないこと、などを確認しておきたい。

以上のことから，“有点儿”と“比较”を用いる際の基準について、以下のような仮説を立てることができる。

〔“有点儿”を用いる際の基準〕

「他者との共有が不可能、または不必要であるような個体的、感覚的、主観的基準」

〔“比较”を用いる際の基準〕

「他者との共有が可能であると話し手が感じているような、一般的、常識的、客観的基準」

以下、この仮説に従って，“有点儿”と“比较”が用いられる状況を比較し、検証を試みる。

## 2. “有点儿”と“比较”を用いる際の基準について

2.1 ここでは、先の1.6を受け、体内感覚と人称との関わりから考えてみる。

31) a. 我肚子有点儿疼。

b. ??我肚子比较疼。

32) a. ??他肚子有点儿疼。

b. ??他肚子比较疼。

33) a. ??他有点儿累。

b. ??他比较累。

上例では、31) *a* のみ成立する。そもそも痛み、疲れといった、肉体的生理的感覚は、他者との共有が不可能なものであろう。従って、そのような事柄について“比較”を使うことは、主語の人称に関わらず、不適切である。一方、“有点儿”については、他者との共有が不可能な事柄について述べているのである以上、その感覚の主体と、それについての話者とが一致している場合にしか用い得ないのである。つまり、“有点儿”は話し手自身の実感を表しているものであり、他人の体内感覚について用いるのは、おかしいのである。

2.2 以下の例は、普遍的な法則や定理などについて述べられた文である。

- 34) *a.* ??在月球上，引力有点儿弱。  
*b.* 在月球上，引力比较弱。
- 35) *a.* ??原子核也是可以分割的，不过结合得有点儿牢固。  
*b.* 原子核也是可以分割的，不过结合得比较牢固。
- 36) *a.* ??因高空温度有点儿低，水滴受冷而变成冰粒。  
*b.* 因高空温度比较低，水滴受冷而变成冰粒。
- 37) *a.* ??蘑菇是一种有点儿低等的植物，属于真菌类。  
*b.* 蘑菇是一种比较低等的植物，属于真菌类。

上例 34)~37)において、“有点儿”を用いた例文 *a* は、いずれも一般には不成立である。月の引力や原子核の結合といった、科学的な法則や定理など、個々人の主観に関わりなく、もっぱら客観性、普遍性のみを追求して述べられたものについては、“有点儿”の使用は不適當であり、“比較”しか用い得ない。

2.3 ここでは、発話者が情報の媒介者となっている例を取り上げる。

- 38) スチュワーデスが機内にて  
*a.* ??地面气温有点儿低。  
*b.* 地面气温比较低。
- 39) アナウンサーがテレビで  
*a.* ??明天湿度有点儿高。  
*b.* 明天湿度比较高。

この場合、“有点儿”の使用が不可能なのは、先の例15), 16)の場合と同様、話し手が身をもって体験したことでないからだ、ということもできる。



## “有点儿”と“比较”について

しかし、ここで重要なのはむしろ話し手と聞き手の関係、或いはこの発言がなされる場の性格であろう。つまり、この場合において話し手は、客観的情報を不特定多数の人に伝える媒介者にすぎない。従って、そこで話される内容は、話し手一個の主観的な感覚、感想であってはならず、あくまでも、不特定多数の聞き手にとって共通に有意味であり、かつ理解可能なものでなければならぬ。よって話者一個の主観を基準とする“有点儿”はふさわしくなく、他者との共有可能な客観性を基準とする“比较”の使用がふさわしいと思われる。

2.4 以上の結果から、“有点儿”と“比较”を用いる際の基準は確認できたかと思う。つまり、“有点儿”は話し手自身が尺度となって用いられる副詞であり、そこからのズレ＝不如意の意味が生じてくるのである。また、“有点儿”は往々にして已然のことに用いられ、話し手の感知し得ないこと（未然のことや、他人の内部感覚など）については用いられない。一方、“比较”はそうした主観性を排除し、客観的基準に照らして、公正な角度から事実をありのままに、いわば平叙的に叙述する際に用いられる。

ここで再度先の1.3で挙げた例11)について考えると、この場合、店員は他の数多くの客の足や、或いは製品として作られている靴のサイズの範囲の中で、その靴を「大きめだ」と表現している。一方客の方は、他者の足など念頭になく、自分の足のみを基準として、もっぱら自身の足における違和感を言い表わそうとしているのだと考えられる。

3. 以上が“有点儿”と“比较”についてのもっとも基本的な使いわけの原則である。但し、先に述べた原則と一見矛盾するかと思える現象が存在するので、最後に取り上げ、これらについて解釈を試みたい。

3.1 “有点儿”は話し手自身の実感を表していると述べた。従って一般に“有点儿”は已然のことであり、しかも発話者自身が体験したことについてしか用いられない。確かに、以下の例は、そのままでは成立することが非常に難しい。

40) ??明天我有点儿忙。

41) ??他有点儿忙。

42) ??他肚子有点儿疼。

しかし、ある条件を満たした場合には、成立が可能となる。例えば、

43) 明天我有点儿忙，有三个会议。

また、秘書が社長のことについて、或いは娘が父親のことについて、

44) 他有点儿忙。

或いは彼から“我肚子有点儿疼”と言われた人が、他人にその情報を伝えて

45) 他肚子有点儿疼。

43) について、このように“有三个会议”のような具体的な限定が加えられることによって、述語の表す事柄が未然であっても、“有点儿”の使用が可能となるのはなぜであろうか。それは、このような限定が加わることによって、話し手が述語の表す事柄を、実現確実な事柄として捉えることができるようになるからではないだろうかと考えられる。つまり、忙しくなるのは明日のことではあるが、その実現を信じることによって、忙しさに対するある種の実感が発話の時点において既に生じているのである。

44), 45) について、他者との共有が不可能な感覚について、その感覚を感じている主体と、それについての話者とが分離している場合においても、ある具体的な限定が加えられ、“他”の予定や状態について話し手が確実に掌握していれば、彼の実感を代弁し得る立場にある者として、“有点儿”の使用が可能となるのである。

3.2 以下の例は、“贬义”の形容詞や、話者にとってマイナスな事柄を表しているにもかかわらず、“有点儿”が成立しない。

46) a. ??我长得有点儿丑。

(私はちょっとみにくい)

b. 我长得比较丑。

(私はわりとみにくい)

47) a. ??我有点儿傻。

(私はちょっと馬鹿だ)

b. 我比较傻。

(私はわりと馬鹿だ)

“有点儿”と“比較”について

- 48) a. ??我肚子有点儿大。  
(私はちょっとお腹が出ている)  
b. 我肚子比较大。  
(私はわりにお腹が出ている)

しかし、

- 49) 她长得有点儿丑。  
50) 他有点儿傻。  
51) 他肚子有点儿大。

はいずれも成立する。

46)～48)の場合、そもそもこうした“丑”や“傻”といった言葉を、話し手が自分自身に対して用いるのは、謙遜もしくは卑下している場合である。こうした場合に、「少し」という言葉を用いて、謙遜の度合いを弱めることは、不自然なのではないだろうか。(日本語でも、「私は少し馬鹿だ」とは言わないし、無理に言うとするれば、何か特殊な状況下にあるように感じられる。)しかし、他人のことに對してならば、婉曲な表現として、問題なく用いることができると考えられる。

“有点儿”は語気を表す副詞“真”や“太”などとも共起するのだが、ここに真を加えると、これらの文は成立する。

- 52) 我长得真有点儿丑。  
53) 我真有点儿丑。  
54) 我肚子真有点儿大。

このような“真”のモダリティ性が、文の成立にどう関わるのかについては今後の課題としておきたい<sup>5)</sup>。

[付記]

本稿は日本中国語学会関東支部1993年7月例会における口頭発表に基づくものである。発表にあたっては、お茶の水女子大学の相原茂先生はじめ楊達氏および多くの方々から貴重なご意見ご助言をいただいた。特に記して感謝の意を表したい。

〈注〉

- 1) “有点儿”は「動詞+量詞」の構造である場合もある。  
例：碗里有点儿水（お碗の中に水が少しある）。  
また，“比较”には動詞としての用法もある。  
例：比较异同（異同を比べる）。  
本稿ではこれらを除外し、副詞的用法についてのみとりあげた。
- 2) 馬真1989では、[有点儿+形容詞]を“表示程度轻微”というグループと，“表示性质轻度偏离”というグループの二つに分け、前者のグループの形容詞性成分は，“贬义”の形詞か“不+褒义形容詞”に限られる、としている。
- 3) 17)の“大概”は“可能”とも互換可能である。また、18)の“好像”は“大概”，“可能”とも互換可能である。
- 4) 例外的に“我肚子比较疼”が成立する場合がある。インフォーマントによれば、話し手はひどく腹が痛むにもかかわらず、聞き手に対する配慮から、あえて“比较”を用いるということであり、この場合，“比较”の使用基準が応用された形と考えられる。
- 5) 同様の例で、  
??我家有点儿穷。  
は，“真”を用いても成立しない。このような、[真+有点儿+形容詞]の成立する条件についても、今後の課題としたい。

〈参考文献〉

- 北京大学中文系 1955, 1957級語言班編  
1986《現代漢語虚詞例積》商務印書館
- 程美珍 1988〈受“有点儿”修飾的詞語的褒貶義〉《世界漢語教学》第3期
- 劉月華等 1986《實用現代漢語語法》外語教学与研究出版社
- 陸儉明等 1990《虚詞》人民教育出版社
- 陸儉明・馬真 1985《現代漢語虚詞散論》北京大学出版社
- 呂叔湘 1980《現代漢語八百詞》商務印書館
- 馬真 1988〈程度副詞在表示程度比較句式中的分布情況考察〉《世界漢語教学》第2期
- 馬真 1989〈説副詞“有一點儿”〉《世界漢語教学》第4期
- 曲阜師範大学本書編写組編 1992《現代漢語常用虚詞詞典》江教育出版社
- 楊從 1988〈不定量詞“点”以及“一点”“有点”的用法〉《語言教学与研究》第3期
- 王自強 1984《現代漢語虚詞用法小辭典》上海辭書出版社
- 中川正之 1991〔“有点儿”と“一点儿”〕『中国語學習 Q&A』大修館